

子どもと保育の情景 (5)

「自分で蒔いた種」を 自分のものとして収穫すること

戸田雅美

一月のある日の幼稚園でのこと。この日は、空気は冷たかったが日差しが強く、園庭は陽だまりで気持ちよかった。ほとんどの子どもたちは園庭で思い思いに遊んでいた。

朝からずっと、氷鬼の変形の鬼ごっこをしていた四歳児の子どもたちは、もうすでに汗だくになっていた。担任も一緒に入り、鬼になって走り回っていた。鬼の数が少なかったので、子どもたちを捕まえ

て氷にして固まらせても、すぐに仲間にタッチされ、氷がとけて助けられてしまうので、担任も汗だくになっていた。見ていると、けんすけは動きも素早く、遊びこんでいるらしく、せっかく鬼が捕まえた子どもを次々とタッチして逃がしていた。

しばらくして、けんすけが、捕まった子どもを助けようと安全地帯を出た所で、担任にタッチされてしまった。けれども、けんすけは、氷になろうとせず逃げていく。「タッチ！ けんすけ君タッチした

よ」と担任が言っても、けんすけは逃げ続ける。「けんすけ君、それはずるいよ」と担任が言うと、「だって、ぼくはタイムしてたもん。水飲みたかったから」と急に水道に行って水を飲む。「だって、私がタッチした方が先だから、やっぱりそれはずるいよ」と担任。一緒に遊んでいた子どもたちもさすがに「ずるいよ」と言うが、「ちがうよ。『タイム』って言ったのに先生が追いかけてきたんだよ」とけんすけはなおも言う。



MAOAS

動きも特別素早いのが、担任に対しても、一歩も引かずに反論を試みるこの姿勢もなかなかである。それだけ今のけんすけには「タッチして助ける」ということへの思いが強いのだろう。他の四歳児たちには、遊びに対してまだそこまでの強い目的意識はないようで、単純に「追う―逃げる」のスリルを楽しんでいる。だから、そこまで粘るけんすけをどう理解したらよいか、わからないようにも見えた。

あまりけんすけが言い張るので、とうとう担任は「やーめた。けんすけ君ずるするんだもの。あーあ、疲れちゃった」と言って、少し離れた所に腰を下ろしてしまった。もともと鬼が少なく、大人である担任が全速力で走って初めて遊びのおもしろさの均衡が保たれていたのに、担任が抜けるとどうなるのか。そのことに、いち早く気づいたのは、けんすけだった。他の子は担任が抜けてもいいや…という

感じて動き始めているにもかかわらず、けんすけは、立ち止まったまましばらく動かなかった。けんすけが「先生、やめるなんてずるい！」と言うと「だって、けんすけ君がずるするんだもの。それに私本当は疲れたから休憩したいの」と担任は答える。

けんすけは、担任が座っている所から二メートルくらい離れた人工芝の上に大の字になって寝てしまった。そのまま青く晴れ渡った空をじっと見つめていたが、気がつくど、何かぶつぶつ言っている様子である。なんだか日光浴でもしているような時間が流れた。担任も、他の子どもたちも自然と一休みの雰囲気か漂っていた。

しばらくすると、担任が「何か言ってるの？」と聞く。けんすけは「『ごめん』って言ったんだよ」と、ぼそっと答える。「えっ？」と担任が聞き返すと、「ごめん、だからさ、また先生もやろう」とまだ青空に顔を向けたままのけんすけ。これをき

かけに、担任はまた鬼になることになり遊びが再開した。

同じ日、別の四歳児のクラスでのこと。はんなは砂場の横で、えりに数珠玉を取られたと泣いていた。えりは、はんながくれたから料理に入れたのだと言う。どうやら、砂場用のバケツの泥のシチューの中に数珠玉が入っているらしい。そういえば、はんなは朝から数珠玉を持っていて、私にも「あげようか」といつて何回も自慢げに見せてくれていたことを思い出した。えりにしてみればそれならもううかなと思つて手を出したとしても、不思議はないような気がする。

担任は二人の言い分を丁寧に聞き、はんなには「はんなちゃんは大事な数珠玉だから見せただけだったのね」と共感し、えりには「えりちゃんも出来るって思っちゃったのね、それでおいしいシチューにしたのね、そうかい、困ったね」と話しか

ける。「でも、はんなちゃん、まだたくさん持つてるよね」と担任がはんなの手のひらを開いてみると一握りの数珠玉がある。「でも、私の大事な数珠玉なの」とはんなは納得しない。

担任はとても困って「じゃ、はんなちゃん、このシチューの中を全部探してみる?」「えりちゃん、シチューの中を探してみてもいい?」と聞く。えりは、あっさり「いいよ」とバケツをはんなの方に出す。「どうする? 全部少しづつ探せば見つかるかもしれないよ」と担任。はんなはどうやらこの展開は予想外だったらしく、バケツの泥んこをしげらくじっと見つめていたが、「やっぱり、いい」と担任に寄りかかった。

保育者は子どもが「こうしたい」ということに向き合っていく。「先生のほうがずるい」とどうしても言うならば、「それはおかしいと思うからやめる」

ことにしたり、どうしても数珠玉が大事なら、本気で探そうと誘ってみたりする。そのとき、子どもが本場に「ぼくが正しい」と思うならば、逆に言えば、「先生がずるい」と思うならば、保育者が抜けたままでも構わないと思うだろう。また、本場に一粒の数珠玉が大事だと思えば探すだろう。もしそうならば、その選択に保育者も付き合っていく。

子どもたちは、「自分の蒔いた種」に向き合うことで、その結果を引き受ける。一般には「自分の蒔いた種だった」という言葉はあまり良い意味で使われない。しかし、「自分の蒔いた種」を自分のものとして受け止めてみて初めて、その結果を自らの育ちの糧として、自ら収穫していくことができる。子どもが「自分の蒔いた種」を自分のものとして収穫していく状況がつけられることは、保育の大切な営みである。

(東京家政大学)